新しい時代の到来と幻滅
――*Go Down, Moses* におけるバンガロー表象

島　貫　香　代　子

William Faulkner の *Go Down, Moses*（1942）には、ミシシッピ州ヨクナパトーファ郡ジェファソンの McCaslin 家にまつわる人々と土地の関係性が7つの物語を通して描かれている。[1] “The Bear” の第4セクションでは、Isaac McCaslin（Ike）が従兄弟違いの Carothers McCaslin Edmonds（Cass）に McCaslin 農園のことを “accursed,” “tainted,” “cursed” と述べるだけでなく、“This whole land, the whole South, is cursed” と主張することで、農園をアメリカ南部の負のイメージに結びつけている（248, 250, 266）。従来の研究では、祖父 Lucius Quintus Carothers（Carothers）、父 Theophilus（Uncle Buck）、そしておじ Amodeus（Uncle Buddy）が書き残した古い台帳を読んで、祖父の黒人奴隷女性に対する近親相姦に気づいた16歳の Ike が、21歳になったときに「自由」を求めて一族の農園の相続を放棄するにいたる背景とその是非が主な焦点となってきた。[2] これまで重視されてきたのは奴隷制時代まで遡る南部の人種混交と人種差別の歴史であり、農園はその過去を象徴する歴史的遺産なのである。第4セクションは主として Ike の放棄と Cass の説得を軸に展開するが、二人の対話では、農園は自然界との対比においても議論されてきた。[3] インディアンから購入した未開の土地に農園を建設して繁栄した McCaslin 家の歴史は、アメリカ開拓史に

---

1)　この作品の題名は当初 *Go Down, Moses and Other Stories* であったが、1949年に「これは短編集ではなく一つの長編小説である」と Faulkner が主張したため、題名の後半部分が削除されることになった（Kinney xviii）。7つの物語のうち、“Pantaloon in Black” は一見独立した短編のように見えるが、中心人物の Rider と Mannie の住む借家が McCaslin 家の敷地内にあることから、この物語も他の章とゆるやかに地理的につながっている。本作品において土地が重要な位置を占めていることの証左であると言えるだろう。

2)　農園の継承を放棄する旨を Cass に伝えた Ike は、対話の終盤で “I am free”（285）と語る。William H. Rueckert によると、Ike の「自由」は奴隷制を含む祖父の家督と旧世界に遡る McCaslin 家の白人男系のすべての系譜からの自由を意味し、Ike にとって自然界への指南役である Sam Fathers は様々な所有行為から Ike を自由にする（240-42）。Rueckert は Ike が最終的に自由になったことを前提に考察しており、James Early も Ike の「自由」が代々続く人種的不正行為に対する責任からの自由を意味すると述べているが、Creighton、Dawson、Dunn、Kuyk、Schreiber の否定的な意見もあり、Ike の相続放棄と「自由」については未だ議論の余地が多く残っている。Rueckert 243、Early 55、Creighton 130-31、Dawson 387-88、404、Dunn 417、Kuyk 143、Schreiber 489-92 を参照のこと。

3)　このセクションの冒頭の “himself and his cousin juxtaposed not against the wilderness but against the tamed land which was to have been his heritage”（243）では、文明を象徴する農園（“the tamed land”）が自然を代表する荒野（“the wilderness”）に対比された存在として描かれている。しかし、第1セクションの冒頭ですでに明らかになっているように、Ike たちが猟場とする「荒野」も結局のところは Major de Spain の領地（さらに遡るとチカソー族の酋長 Ikkemotubbe の所有地）であり、完全な「自然」ではないことが、この作品の文明と自然の関係性を一層複雑なものにしている。一例として、Wittenberg 50-53、Thomas 565-67、Gleeson-White 403-04、Stein、Peters を参照のこと。

つながる文明論的なテーマを包含しているのである。[4] McCaslin家の男系の継承者であるIkeの農園財産の放棄は、南部の土地所有を考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。

本作品ではMcCaslin農園の存在意義が強調される一方、Ikeが農園の相続を放棄した後に結婚して移り住んだバンガローについては、わずか数頁のなかで “cheap”（4）や “jerrybuilt”（269）と簡単に触れられるだけにとどまっている。その記述の少なさも相まって、従来の研究においてもこのバンガローはほとんど議論の対象とされてこなかった。確かに、Ikeのバンガローは彼の妻の父親から贈られたものであり、たとえ彼が自ら建てたにせよ、新たな人生を切り開いていこうとする「セルフメイド・マン」としての彼の決意を示すものであるとは思えない。しかし、Faulknerが本作品を執筆していた1930年代後半から1940年代初頭までのアメリカの住居形態や彼自身の住宅事情に鑑みると、バンガローがIkeの終の棲家として描かれていることについては一考の余地がある。Ikeのバンガロー建設には、通信販売のキット住宅（組立式住宅）の普及にともなうバンガローの流行といった20世紀前半の住宅建設状況に対するFaulknerの批判的心情が反映されていると思われるからだ。本稿では、本作品に登場する様々な住居に言及したうえで、Ikeのバンガロー建設を通して描かれる新しい住宅様式の登場とそれに対するFaulknerの幻滅について考察する。

1. 農園からバンガローへ――新しい時代の到来

*Go Down, Moses*には、1772年にCarothersが生まれてから1941年にLucas Quintus Carothers McCaslin Beauchamp（Lucas）が埋蔵金探しに夢中になるまでの170年近くに及ぶ出来事が描かれている。この間の時代の変化は、McCaslin家の黒人の系譜に連なるLucasの独立心と行動力に見られる人種的な立ち位置の変化や、鉄道の開通と工場の進出による社会環境の変化から読み取ることができるが、その他にも住居形態の変化として描かれている。以下では、本作品に登場する様々な住居を確認することで、Ikeがバンガローを建てるにいたった背景を検証する。

本作品に限らず、南部の大規模農園はFaulkner作品の伝統的な旧家の生活を彩る重要な役割を果たしている。*Absalom, Absalom!*（1936）のThomas Sutpenがジェファソン郊外に広大な農園を作り上げるのに心血を注いだことからもわかるとおり、南北戦争以前の南部の白人男性にとって、農園主や大地主になることは大きな夢であり、ステータスであった。ところが、南北戦争で奴隷制を支持した南軍が敗北すると、奴隷制に基づく綿花栽培で栄えた旧家は没落の一途をたどり、農園の権威や価値が問われるようになる。FaulknerはSutpenの栄枯盛衰を通して農園制度を前景化し、*Go Down, Moses*で農園のあり方に対

---

[4] McCaslin家の系譜は黒人と白人から構成されているが、*Go Down, Moses*にはこの一族の他にインディアンの系譜――チカソー族の酋長Ikkemotubbe、Ikkemotubbeと4分の1混血の黒人奴隷女性とのあいだに生まれたSam Fathers、白人とインディアンの混血Boon Hogganbeck、純血のチカソー族のJoe Baker――が登場する。先住民のインディアンがアメリカ史において重要な位置づけにあるのと同様、本作品における文明と自然の関係性を論じるうえでもこれらの登場人物は大きな役割を果たしている。

する様々な反応を描いているのである。

本作品では、複数の登場人物の住居移動を通して農園の存在意義が問われている。IkeはMcCaslin農園の相続権を放棄するが、放棄までにはいたらないにせよ、彼の父親とおじも、住まいを移すことで奴隷制に基づく農園のあり方に異を唱える意思表示を行っている。1837年に父親Carothersが死んだ後、彼らは所有していたすべての黒人奴隷を解放するだけでなく、当時まだ完成していなかった農園邸宅をこれらの奴隷に明け渡し、自分たちは "a one-room log cabin" (250-51) を建ててそこに住む。[5] 確かに、この二人は夜間の "the Patrol-riders" (251) を避けるために黒人奴隷のいる農園邸宅の表玄関を形式的に閉ざしているし (実際には黒人奴隷が裏玄関から自由に出入りすることができるようになっている)、Ikeの父親にいたってはSophonsiba Beauchampと結婚した後に屋敷に再び住んでいるので、完全にリベラルな立場を取っているわけではない。とはいえ、この二人の丸太小屋への引越しは、南北戦争以前の奴隷制に基づく閉鎖的な南部において、彼らが先駆的な人種観と行動力を持ちあわせていたことを示している。自身の父親とおじの当時としては逸脱した行為が、McCaslin家の屋敷で生まれ育ったIkeの住居観や農園の放棄に少なからず影響を及ぼしたことは想像に難くない。

さらに、Ikeの自然界における "mentor" (201) として父親的役割を果たすSam FathersもIkeの住居観に寄与している。[6] チカソー族の酋長である父親Ikkemotubbeによって黒人奴隷の母親とともにMcCaslin家に売られた混血のSamは、その後ずっと黒人地区の "a cabin" (163) に住んでいたが、純血のチカソー族であるJoe Bakerの死後、Big Bottomと呼ばれる森のなかにJoe Bakerの "a foul little shack" (165) あるいは "hut" (165, 166, 205) に似た小屋を建てて移り住む。Samの引越しは、同じチカソー族の血が流れているという理由で、彼がJoe Bakerを "kin" (168) として見なしていたことを物語る。[7] つまり、Ikeたち白人の狩猟仲間に "I want to go" や "Let me go" (167) と懇願するSamは、黒人地区から "a little hut something like Joe Baker's, only stouter, tighter" (205) に移り住むことで、自らのチカソー族の出自を尊重する姿勢を明確にしたのである。移り住んだ小屋が "only stouter, tighter" なのはSamの頑強な意思と人種的束縛からの解放をあらわしていると言えるだろう。Ikeは住まいが自らのアイデンティティを形成することをSamの引越しから学ぶのである。

Ikeの父親やSamの例では住居移動に前向きな意味合いを見出すことができるが、Ikeの農園放棄を考えるにあたり、同時代という点で示唆的な作品は *The Sound and the Fury*

---

5) "The Fire and the Hearth" では "the two log wings which Carothers McCaslin had built" (44) となっており、若干の誤差が生じているが、二人が丸太小屋に移り住んだことには変わりがない。

6) Annette BernertはIkeの父親あるいは父親的存在としてUncle Buck、Sam、Cass、そしてCarothersの4名を挙げている(181)。本稿ではUncle BuckとSamに焦点を当てたが、CarothersとCassもそれぞれの住居の移動を通してMcCaslin農園を建設／継承する意思表示を行っていると言える。

7) "The Old People" には、臨終のJoe Bakerが彼の小屋でSamの "the sudden burst of flame" (166) によって命を絶ったことが示唆されている。"The Bear" でも、Samの死に関与したことをCassに詰問されたBoonが "This is the way [Sam] wanted it. He told us. He told us exactly how to do it" (242) と述べていることから、チカソー族には死を迎えるための独特の慣習があることがわかる。そして、混血であるにもかかわらず、SamとBoonがチカソー族の葬り方を尊重していることがうかがえる。

（1929）に登場するCompson一族の系譜を描いた“Appendix: Compsons: 1699-1945”（1946）であろう。*The Sound and the Fury*の「第5セクション」とも称される“Appendix”には、この小説の第3セクションの語り手で、一族の最後の末裔となったJason Compsonが、母親の死後、かつてCompson Mileと呼ばれた広大な屋敷と土地をすべて売り払って、よりコンパクトな住まいに引っ越したことが記されている。

> Jason IV. The first sane Compson since before Culloden and（a childless bachelor）hence the last. . . . Who . . . vacated the old house, first chopping up the vast oncesplendid rooms into what he called apartments and selling the whole thing to a countryman who opened a boardinghouse in it. . . . [W]ho following the mother's death in 1933 was able to free himself forever not only from the idiot brother and the house but from the Negro woman too, moving into a pair of offices up a flight of stairs above the supplystore containing his cotton ledgers and samples, which he had converted into a bedroom-kitchen-bath. . . . He was emancipated now. He was free. 'In 1865,' he would say, 'Abe Lincoln freed the niggers from the Compsons. In 1933, Jason Compson freed the Compsons from the niggers.'（“Appendix” 342-45）

この記述を通して明らかになるのは、Compson家がJasonの代で終わりを告げたこと、そしてジェファソン有数の名家であるCompson家の跡取り息子が住むにはふさわしくないところに彼が移り住んだことである。Jasonの顛末は没落した旧家の悲哀を感じさせるが、その一方で新たな時代の到来を予感させることも見逃せない。実際、19世紀末から20世紀前半にかけて、南部ひいてはアメリカ全土では住宅や生活環境に対する新たな価値観が芽生えていた。Jasonが屋敷を“a countryman”に売却したのもその一例であろうし、Compson屋敷が最終的に“a boardinghouse”になったことは、近年に農園邸宅や大邸宅が朝食付き宿泊所（bed and breakfasts）として機能するようになったことを想起させる。“The first sane Compson”という言い回しからもわかるように、Jasonの言動――本稿の文脈で強調するならば彼の屋敷売却と簡易住宅への引越し――は“Appendix”のなかできわめて妥当な行為として提示されているのだ。

Thadious M. Davisは、Malcolm Cowleyが編纂した*The Portable Faulkner*（1946）に収録された“Appendix”が本作品の出版後に執筆されたことを指摘しているが（238）、これは本稿の議論にとって重要な指摘となる。というのも、Ikeの農園相続の放棄とバンガローへの移動が、彼と同様に一族の土地財産を相続する立場にあったJasonひいてはCompson家に関する記述内容に大きな影響を与えたと思われるからだ。旧態依然としたCompson屋敷、神経過敏な母親、白痴の弟Benjy、そして黒人召使Dilseyから解放されたJasonが“a pair of offices”を自ら改装した「家」に移り住んで自由を実感したときに述べた発言は、Cassとのやりとりの終盤でIkeが“I am free”（285）さらには“Sam Fathers set me free”（286）と語る場面を想起させる。本作品は*The Sound and the Fury*や“Appendix”のような一族の没落の物語ではないが、登場人物が世襲の住居形態に息苦しさを感じていることは共通しており、新たな生き方を模索する手段として住居移動が行われる。

“Appendix”のJasonの顛末は、Ikeの農園放棄が当時の南部においてそれほど例外的で

はなかったことを示唆するが、南部の土地放棄は実際にどれほど行われていたのだろうか。Don H. Doyleによると、南北戦争以前の1840年代後半から、裕福な農園主とその家族は監督者に町の郊外に建設された農園の日常管理を任せて、市内に立派な大邸宅を建てて住んでいた。Faulkner作品の舞台のモデルとなったオクスフォードでは、North and South Street（1930年頃にLamar Streetに改名）に壮大な邸宅が数多く軒を連ねていたという。これらの大邸宅は主に南北戦争以前の新古典主義建造物を模倣したもので、木造の下見板と二階まで伸びた白い柱廊のある入口を備えた、四角くて巨大な白色の二階建て住居であった。1890年代後半から1920年代にかけて台所やトイレなどの住宅設備が改善され、農園主とその家族は教会、学校、商店、その他の公共施設が家の近くにある便利な生活を楽しんでいたことがわかっている（Doyle 330-33, 349）。Ikeの場合、農園を去るだけでなくその相続権をも放棄するため、土地所有権を放棄するまでにはいたらない農園主と単純に比較することはできない。しかし、Ikeが去った後もCassと彼の子孫によってMcCaslin農園が存続していくことに鑑みても、農園主の実質的な農園離れが早くから進んでいたことは注目に値するだろう。

さらに20世紀以降になると、南北戦争以前に建てられた農園邸宅は崩壊の一途をたどった。1910年のとある社説には、農園を放棄して町にやってくる人々が増加したために古い家屋が荒廃してしまったことを嘆く記事が掲載されていたという（Doyle 335, 345）。しかも、このような古い大邸宅の放棄は所有者の死によるものではなく、広大な敷地にかかる高額な維持費と衛生上の問題が原因であった（Aiken, “Old Agrarian Culture” 6）。過去150年のあいだに南部のほとんどの農園が消滅したことを調査したMarc R. Matranaは、その要因として “progress, neglect, and other threats [such as natural disasters]” を挙げている（xiii）。Ikeの農園放棄が彼の祖先の近親相姦と人種問題に起因することから、これはMcCaslin家のみに起こった特別な出来事のように捉えられがちだが、農園に対する南部の人々の意識は、「住み心地」という観点においても時代とともに着実に変化していたのである。

Faulkner自身も、本作品の執筆を開始する前の1929年頃から住まいについて深く考える機会が増えていたが、彼の住宅嗜好は当時の傾向に反したものであった。1929年にEstelle Oldhamと結婚した後、FaulknerはEstelleと彼女の連れ子MalcolmとVictoriaとともにオクスフォードのUniversity Avenue沿いにあるElma Meek夫人の家の1階部分を借りて住んでいたが、家族でより定住できる家を探していた。1930年に当時 “the Bailey Place” と呼ばれていたギリシャ復興様式の古い邸宅を購入したFaulknerは、そこをJames G. Frazerの *The Golden Bough*（1890-1915）にちなんで “Rowan Oak” と名付け、自ら手を加えながら終生住み続けることになる。南北戦争以前に建てられたRowan Oakは購入当時かなり荒廃していたが、Faulknerはこの家の修理をなるべく人の手を借りずに自力で行い、誰かの助けが必要な場合でもそれが二人を超えることはなかったという。東側の3つの隣接地と西側のBailey’s Woodsの広大な領域がそれぞれ1933年と1938年に加わった結果、Rowan Oakの総面積は4エーカーから31エーカー程度にまで拡大した（Lawrence and Hise 12-14）。Rowan Oakの拡張にとどまらず、Faulknerは1938年にオクスフォードの17マイル北東に位置する320エーカーのGreenfield Farmを購入して綿の栽培を開始しているが、この農場はMcCaslin農園のモデルとなったと言われている（Aiken, *Southern*

Landscape 147; Kinney, *Encyclopedia* 163)。[8] 奴隷制にまつわる南部の負の遺産を描き続けたFaulknerだが、Rowan OakやGreenfield Farmの購入とその後のメンテナンス作業は、農園離れが進んでいたなかで彼が伝統的な南部の住居形態を尊重し、保存しようとしていたことを物語る。

農園を尊重したFaulknerが農園を放棄したIkeの顛末を描く際に選んだ住まいがバンガローであった。本作品には様々な住居形態が登場するが、そのなかでもIkeの住居変更は特筆すべきものがある。*The Sound and the Fury*できわめて現実的な人物として描かれているJasonが "Appendix" で実用的で現代的な家に移り住むことは納得できるが、森を愛し自然を尊重したIkeがその心情を反映させた住居形態を選ばなかったことには違和感が残るからだ。Ikeの父親とSamが自らの意思表示のために丸太小屋と小屋をそれぞれ建てたのに対して、農園の継承を放棄したIkeはしばらく "a rented room" に滞在した後に結婚し、妻の父親から "dowry" として贈られた "the bungalow" を建ててそこに妻と移り住む(297-98)。白人である以上、IkeがSamやJoe Bakerのように小屋を建てて住むのはあまり現実的ではないが、Uncle Buckの丸太小屋については、簡素な作りながらも「セルフメイド・マン」やアメリカ開拓精神の象徴であるため、農園の相続を放棄した彼のイメージにぴったりな住居のように見える。Henry Thoreauがウォールデン湖畔の森のなかに丸太小屋を建てて、1845年から1847年までのあいだほぼ自給自足の質素な生活を約2年間送ったことも想起されるだろう。にもかかわらず、Ikeが農園を放棄した後に最終的に落ち着くのは丸太小屋ではなくてバンガローなのである。

確かに、森のなかに建てられた丸太小屋はIkeにとって理想的な住居のように思えるが、"The Bear" の第5セクションは彼がそこで人生を全うするのが不可能であることを明らかにしている。このセクションで語られるのは第4セクションの3年前の出来事なのだが、[9] この時点でMajor de Spainは所有地の一部である猟場のほぼ全域をメンフィスの製材会社に売却していた。つまり、第4セクションでIkeがMcCaslin農園の相続を放棄したときには、彼に狩猟の場や解放感をもたらしてくれた「荒野」はすでに存在していなかったのだ。Major de Spainが売却しなかったのは伝説的な熊Old Benとの闘争で共倒れした犬のLionとSamが埋葬された区画のみであった。この場所でLionとSamは永遠に "not held fast in earth but free in earth" (313) となった (とIkeは考えている) が、Major de Spainの売却の3

---

[8] Ikeの妻が農園("plantation") のことを農場("farm") と呼んでいるのはFaulknerのGreenfield Farmを思い起こさせるが、本作品の題材となったのはこの農場だけではない。Sally Wolffは、"The Bear" の第4セクションに登場する台帳を創作するにあたり、Faulknerが実在する複数の農場日誌を参考にしていた可能性を指摘している(1-17)。Wolffは特に "the Diary of Francis Terry Leak" に注目し、この日記が本作品の登場人物の名前、物語展開、舞台設定、そして主題に大きな影響を与えたことを検証している(29-47)。

[9] *Go Down, Moses*を長編小説として発表する直前に新たに書き加えられた "The Bear" の第4セクション——McCaslin家の歴史——は時系列に逆らっている。このセクションのIkeは21歳だが、第5セクションの舞台は何の前触れもなくその3年前(Ike18歳)に遡っているのだ。第4セクションの一家の系譜にまつわる物語はその前後のセクションの荒野と狩猟を中心とする展開とはやや一線を画すが、21歳のIkeが一家の財産と土地の相続を放棄することを決意したのは、16歳(第3セクションの年齢と同じ)のときに一家の台帳を見たことに起因すると思われるため、第4セクションが第5セクションの前に位置していてもさほど不思議ではない。

年後に農園を放棄したIkeには、丸太小屋を建てる場所も猟師として活躍する場所もなくなっていたのである。[10] 最終的にIkeは彼の父親やSamのような大工になることを選ぶのだが、彼が建てるのは町中の “a new roof on the stable of the bank’s president” (296) や自身の終の棲家となるバンガローであり、彼にとって「自由」を思わせる森のなかの丸太小屋ではなかった。

Ikeのバンガロー建設を考えるうえで想起されるのが、猟場でIkeたちが寝泊まりするMajor de Spainのキャンプ場の “a paintless six-room bungalow” (187) であろう。従来の研究ではMajor de Spainのバンガローに関する言及はまったくないが、ほとんどの場面において “the house” と記されているこのバンガローには、Faulkner自身の狩猟経験が反映されていると考えられる。Charles S. Aikenによると、1920年代から1930年代までのFaulknerの猟場は “General” James Stoneのキャンプ場なのだが、そのときの宿泊所が、鉄道を2分の1マイル北上したところでタラハチー川を4分の3マイル南下したところにある小さなバンガローなのである (*Southern Landscape* 161)。質素な見た目 (“paintless”) ながらも6室もの部屋が備わっているMajor de SpainのバンガローはFaulknerが利用したバンガローよりも大規模で立派な構造かもしれないが、両方とも狩猟キャンプで用いられたことは共通している。これを考慮するならば、McCaslin農園を去ったIkeがバンガローを建てるにあたっては、その時点ですでに過去の思い出となっていた古き良き時代のBig Bottomでの狩猟に対するノスタルジックな感情が脳裏をよぎったと考えられなくもない。とはいうものの、かつて “the men, not white nor black nor red but men, hunters” (184) がBig Bottomで狩猟するときに使用したMajor de Spainのバンガローと同じ様式の家を、Ikeが結婚後に彼と妻の住まいとして町中に建てる行為は、森と狩猟を愛し農園の相続権を放棄したIkeの皮肉な結末を暗示していると言わざるをえない。Major de Spainのバンガローと比較しても、Ikeのバンガローは新しい時代の住宅事情を反映していると考えるのが妥当である。

特に20世紀以降、南部の農園文化が都市化によって歴史的に新たな局面を迎えていたことは前述したが、町中のIkeのバンガローもそのような住宅様式の変化の影響を受けている。Ikeのバンガロー建設は、彼の新しい人生の始まりだけでなく、新しい住居形態の幕開けを告げる役割を果たしているのだ。しかしそれは、Ikeの父親やSam、さらに “Appendix” のJasonの前向きな住居移動とは異なり、Ikeのアンチクライマックスな顛末を体現する結果となる。以下では、Ikeのバンガローについてさらに考察を進めていく。

---

[10] 「荒野」については注3を改めて参照のこと。“Delta Autumn” には、“Uncle Ike” と呼ばれるようになった晩年のIkeがCassの孫Carothers Edmonds (Roth) などの若者とミシシッピ・デルタへ狩猟に出かけて、彼らに狩猟の手ほどきを行う様子が描かれているが、語り手が “Most of [the wilderness] was gone now” (324) と述べているように、風景と時代は様変わりしていて、「荒野」を思わせる過去の面影はほとんどない。

2. Ikeのバンガロー建設――新しい時代への幻滅

Faulknerは故郷オクスフォードの伝統的建造物の消滅に危機感を抱き続けていた。[11] 1940年代のFaulknerは、「スクエア」と呼ばれるダウンタウン中心部の広場にある2階のベランダや南北戦争以前に建てられたCumberland Presbyterian Churchの取り壊しを危惧していたし、ラフェイエット郡庁舎の建て替えの噂に神経をとがらせていたという（Hines 117）。*Go Down, Moses*出版後の出来事ではあるが、1947年の春に郡庁舎の解体が検討されていたとき、Faulknerは郊外の古い農園が激減した例を用いて次のように反対している。

> Already on the outskirts of town he had seen the old plantations being divided and subdivided into row after row of suburban bungalows, leaving only a few "old obsolete columned houses still standing among them," wrote Faulkner, "like old horses surged out of slumber among a flock of sheep." How much longer would it be before the Oxford he knew would be "obliterated, effaced, no trace left"? (Carpenter 619)

古い建物が次々に姿を消していくことを懸念したFaulknerは伝統的建造物の保存を求める文書を寄稿しているが、本稿の文脈で注目したいのは、過去の建造物が破壊された後に建てられたのがバンガローであるということだ。Aikenはオクスフォードの住宅の変化を次のように検証している。

> As the twentieth century progressed, some of the more affluent families who lived in big houses built new dwellings, usually one-story bungalows and ranch houses that incorporated new wonders of material culture, including plumbing and gas furnaces and hot water heaters. (Aiken, "Old Agrarian Culture" 8)

Aikenはさらに、Faulknerの時代には南北戦争以前の農園邸宅のほとんどがラフェイエット郡から姿を消しており、存続しているわずかな大邸宅も多くの場合、Rowan Oakのように改修されていたと指摘する（*Southern Landscape* 3）。Faulknerの寄稿やAikenの考察は、Faulknerがバンガローをかつての時代の破壊者としてとらえ、故郷の「バンガロー化」を憂いていたことを示している。Ikeのバンガローは彼の後半生が自身の理想からほど遠いものであることを示唆するだけでなく、Rowan Oakを購入・改修して住み続けたFaulknerの新しい時代に対する幻滅をもあらわしているのである。

まずは、Ikeのバンガローが本作品でどのように描かれているかを改めて確認しておきたい。"The Bear" の時系列の混乱が示すとおり、*Go Down, Moses*は様々な物語が相互に関係しながら複雑に展開するため、登場人物が別の章の早い段階で紹介されている場合がある。

---

[11] Faulknerの危機感は、彼の曾祖父William Clark Falknerがミシシッピ州リプリーに建てたイタリア風の大邸宅The Falkner Houseが、新たな郵便局の建設のため、1938年に解体されたこととも無関係ではないだろう。The Falkner Houseの顛末についてはMiller 78-81を参照のこと。

“The Bear” の第４セクションで明らかになるIkeの後半生についても、実は最初の章（“Was”）の冒頭ですでに触れられている。

> . . . a widower these twenty years, who in all his life had owned but one object more than he could wear and carry in his pockets and his hands at one time, and this was the narrow iron cot and the stained lean mattress which he used camping in the woods for deer and bear or for fishing or simply because he loved the woods; who owned no property and never desired to since the earth was no man’s but all men’s, as light and air and weather were; who lived still in the cheap frame bungalow in Jefferson which his wife’s father gave them on their marriage and which his wife had willed to him at her death and which he had pretended to accept, acquiesce to, to humor her, ease her going but which was not his, will or not, chancery dying wishes mortmain possession or whatever, himself merely holding it for his wife’s sister and her children who had lived in it with him since his wife’s death, holding himself welcome to live in one room of it as he had during his wife’s time or she during her time or the sister-in-law and her children during the rest of his and after（3-4）

“Was” の大部分はIkeの親世代に関する物語なので、この章でIkeに言及しておく必要は必ずしもないのだが、David Walkerが指摘しているとおり、Faulknerはこの部分を作品全体の「序章」として挿入したのであろう（Walker 1-2）。作品冒頭でのIkeの紹介は彼が本作品の中心人物であることを示しているが（Faulknerも後に “Was” の題名の由来を説明するときにそのように述べている［*FU* 38］）、土地所有権を放棄したIkeを語るキーワードの一つにバンガローが挙げられているのは示唆的である。しかも、それが “cheap” で義理の父親から与えられたものであること、さらに妻の家族のためにそこに住み続けたことは、森を愛し、動産・不動産の所有に否定的なIkeの理想と自由への憧れを打ち砕く。

Ikeの人生については “The Bear” の第４セクションにおいても系譜のかたちで簡単にまとめられており、ここにも彼のバンガローに関する言及が見られる。McCaslin家の古い台帳の記述が一段落したところで、Faulknerは唐突にIkeの略歴をあたかも台帳の延長であるかのように次のように紹介する。

> and that was all: 1874 the boy; 1888 the man, repudiated denied and free; 1895 and husband but no father, unwidowered but without a wife, and found long since that no man is ever free and probably could not bear it if he were; married then and living in Jefferson in the little new jerrybuilt bungalow which his wife’s father had given them. . . .（269）

第４セクションの「現在」は1888年（Ike 21歳）であるため、1895年（Ike 28歳）のエピソードはIkeのその後の人生を先取りするかたちで語られている。1895年のIkeの結婚とバンガローに関する記述は、“repudiated denied and free” となるためにCassと対話を重ねていた21歳のIkeの言動からは想像できないアンチクライマックスな展開である。“Was” の冒頭部分と “The Bear” の第４セクションの引用でIkeのバンガローに “cheap” や “jerrybuilt”

といったネガティブな表現が用いられているのは、農園を去った後のIkeのわびしい生活を示すためなのは明らかだ。これらの引用からは28歳のIkeがかつて求めた「自由」の立場から程遠いところに位置していることが読み取れるが、そのために用いられた効果的な小道具がバンガローなのである。[12)]

確かにバンガローは21歳のときに「自由」になったと思われたIkeが再び束縛の多い人生を送ることになったことを物語る象徴なのだが、当時のアメリカの住宅状況に鑑みると、この住宅様式はアメリカ社会において必ずしも否定的に受け止められていたわけではなかった。20世紀に急速に普及したバンガローには理想と現実の両方の側面が混在しており、Faulknerはその両義的特徴をIkeの顛末に重ね合わせているのだ。以下では、20世紀前半の代表的な住宅様式として発展したバンガローの歴史を概観することで、本作品のIkeのバンガローに対する理解をさらに深める。

まずは「バンガロー」という住宅様式について確認しておきたい。「バンガロー」という用語は、イギリス植民地であったインドのベンガル語で "a low house with galleries or porches all round" を意味する "bānglā" や、ヒンズー教の形容詞で "belonging to Bengal" を意味する "banglā" に由来する（Lancaster 19）。別名「クラフツマン様式」とも呼ばれているバンガローは、その名前が示唆するとおり、19世紀後半のイギリスで工業化に異を唱えたWilliam Morrisのアーツ・アンド・クラフツ運動の流れを汲んだ住宅様式であった。Morrisの反産業主義的思想に触発されたGustav Stickleyが発行した月刊誌 *The Craftsman*（1901-16）は、工芸的造形と自然との融合を目指したバンガローの発展に大きな影響を与えたと言われている。バンガローの形態は多様だが、1階半建てで正面に快適なポーチがあるオープンプラン型の小住宅で、見た目は平屋で単純ながらも便利な構造になっているものが多い（フォーレイ259）。その簡素だが有機的に調和のとれた構造は、それまでのヴィクトリア様式の通俗的で装飾過剰なデザインとは一線を画した住宅を可能にし、Henry L. Wilsonの *The Bungalow Book*（1908）やHenry H. Saylorの *Bungalows*（1911）などのパターンブックが数多く出版された。

20世紀初めの人口の急激な増加に伴い、工業化以前の牧歌的な外観と都会的な設備という両方の要素をあわせもったバンガローは、カリフォルニア州を皮切りに全米で急速に普及した。商業誌で大々的に宣伝されたバンガローは小規模の建設請負業者や分譲地の住宅開発業者によって採用され、家政学者、フェミニスト、そして建築家の支持を得ていく。建築家は当初、バンガローを安普請の住居と見なして軽視していたが、その単純さと機能性が中流階級のアメリカ人のあいだで徐々に評価されるようになり、1919年には建築家Charles Boydが「バンガローはもっともアメリカ的な建物である」と発言するまでになった（奥出153-55）。カリフォルニア南部を思わせる若々しさ、打ち解けた雰囲気、健康的な生活環境、柔軟なデザインと簡単なメンテナンス、そして様々な建築様式への高い順応性といったバンガローのイメージは、人々の心に強く訴えるものがあったのである

---

12) "Delta Autumn" の80歳近くになったIkeの回想において、彼の住まいは "a house in Jefferson, a good house though small"（335）として紹介されるのみであり、バンガローの名前は登場しない。

(Schlereth 93-94)。20世紀前半のアメリカ人にとって、手頃な値段ながら上品で住み心地のよいバンガローは「アメリカンドリーム住宅」(フォーレイ259) と見なされるようになっていた。[13] そしてこのような「アメリカンドリーム住宅」は、大量生産や経費削減などの経済的要請が標準化・画一化を押し進めた結果、実現可能になったのである。

"The Bear" の第4セクションによると、Ikeは1895年の時点ですでに結婚しているので、彼がバンガローを建てたのはそれ以前またはその頃であることがわかる。アメリカのバンガローの多くはおよそ1880年から1930年までのあいだに建設されているので (Winter 10)、彼のバンガロー建設は時流に沿ったものであるように見える。ところが、「クラフツマン様式」とも呼ばれるこの住居形態がミシシッピ州に登場するのは1905年頃あるいは1910年代であり (Sanders n. pag.; "Architectural Style Guide" 12)、Ikeがバンガローを建てた時期とのあいだには時間的な「ずれ」が生じている。[14] このことから、Ikeのバンガローは19世紀末のミシシッピ州の住宅事情よりも、20世紀前半の住宅状況 ——特にFaulknerが本作品を執筆していた1930年代後半から1940年代初めまで——を色濃く反映していると考えた方が妥当である。

確かに、1930年代のFaulknerの住宅建築に関する知識や技術、そして住まいに対する関心の高さは、Ikeの終の棲家がバンガローであることと無関係ではないだろう。Rowan Oakを修理する関係で、FaulknerはElliott's LumberyardとSears Roebuckから信用供与を得ていたが (Lawrence and Hise 13)、後者はバンガローのキット住宅で全米的に有名だった通信販売会社なのである (前者は地元オクスフォードの家族経営の会社)。Faulknerがこういった組立式住宅の存在を知らなかったとは考えられない。というのも、Sears Roebuckが1908年に始めた住宅のカタログ販売は全米でブームを巻き起こしていたからである (八木22, 31)。バンガローの通信販売は1915年までには国内市場を独占し、その勢いは1920年代まで続いたという (Schlereth 93)。Bernard Maybeck、Frank Lloyd Wright、Charles and Henry Greeneなどの有名な建築家もバンガローを設計したが、多くのバンガローは若くて経験の浅い建築家によって建てられていた (Winter 24)。この背景にはバンガローの需要過多だけでなく、この様式の住宅の多くが後述するように "ready-made" であったために建てるのが容易であったことも起因している。実際、通信販売されたバンガローの「屋根材、壁材から扉、窓といった建具や部品、また釘など小さな部材ま

---

[13] Abraham Lincoln大統領やAndrew Jackson大統領の「丸太小屋からホワイトハウスへ」というキャッチフレーズが伝統的なアメリカンドリームを意味することに鑑みても、Ikeが丸太小屋ではなくバンガローを建てるのは示唆的である。

[14] Thomas S. Hinesの検証によると、オクスフォードを含む20世紀初頭のミシシッピ州のスモールタウンでは "the popularized versions of [Frank Lloyd] Wright's Prairie School and the kindred Craftsman-style bungalows of the designer Gustav Stickley" (105) が普及していた。ミシシッピ州におけるバンガロー建設は1940年代後半まで続いたという(Sanders n. pag)。なお、Major de SpainのバンガローはIkeが10歳の時点ですでに存在していることから1877年以前に建てられたことになり(187)、実際のバンガローの建設時期とまったく一致しない。この建設時期を考慮したうえで持ち主の経済力に鑑みると、このバンガローは大量生産型ではないように思われるが、テクストから判断することは難しい。

で含まれたキットには図面や建て方のマニュアルが付いており、素人でも自分で家を建てることができた」と言われている（八木22）。大量生産され、素人同然の人々によって建てられたバンガローは20世紀前半のアメリカの大衆住宅を代表する存在となっていく。

1900年頃から1920年頃までのバンガローには職人の技と本物の材料を重視するものもあったが、1905年頃から急増した大量生産型のバンガローはアーツ・アンド・クラフツ運動が批判した機械生産による製品の質の低下や物質主義的な価値観の尊重をまねいた（ウォーカー186; Sanders n. pag; Winter 15）。バンガローは「クラフトマンシップの大衆化」（八木31）をもたらしたと言われる一方、「安っぽい箱のいいかげんな模倣」（ウォーカー186）を助長したとも批判されたのである。Clay Lancasterはバンガローには二種類あると述べており、“[t]he true bungalow is the exact antithesis of the mass-produced box bungalow”（198）と指摘する。Lancasterは本来のバンガローの理想からかけ離れた“the mass-produced box bungalow”について次のように述べている。

> Many were mass-produced, mail-order, ready-made homes that were conceived by a company employee, whose products went out to all parts of the country. All looking alike, they had not the slightest vestige of regional characteristics. But on the whole they held to the fundamental bungalow traits, such as low forms and snug plans, and the dominating roof. The restricted size of these essays often prompted artifices for superficial individualization, such as unnecessary complex roof shapes . . . , the application of quasi-constructural decoration . . . and combining several materials to further complicate a normally simple member. . . .（Lancaster 181）

ラフェイエット郡に建てられたバンガローには特に際立った特徴が見られなかったため（Sobotka 81）、これらの多くは大量生産型のキット住宅であったと推測できる。Faulknerは執筆当時の住宅業界の流行を本作品に巧みに組み込んでいるが、Ikeのバンガローを形容するのに“cheap”（4）と“jerrybuilt”（269）を用いていることからも、彼がLancasterのようにバンガローを批判的にとらえていたことがわかる。

バンガローの流行を横目に古い建物を修理しながら住んでいたFaulknerがIkeのバンガローを“cheap”や“jerrybuilt”と描写したのには、彼の故郷以外の場所も影響している。Rowan Oakを購入した後、経済的な苦境を乗り切るために1932年からシナリオライターとして断続的にハリウッドに滞在していたFaulknerは、ロサンゼルスのモダニズム建築に接する機会があった。モダニズム的手法を用いて様々な作品を創作したFaulknerだが、19世紀後半以降のヴィクトリア様式をはじめとする近代建築にはまったく関心を寄せておらず、モダニズム文化を牽引した南カリフォルニアにあるロサンゼルスのモダニズム建築についても“the jerry-built, false-front follies”と過小評価していたという（Hines 103, 119）。この“false-front”というデザインに鑑みると、“follies”にはカリフォルニア州から全米に普及したバンガローが含まれていたことは容易に想像できる。たとえばロサンゼルスでは1904年から1913年にかけて人口が3倍に増加し、バンガローが主な住宅として約500もの新しい分譲地に建設されていたからだ（Schlereth 93）。Ikeのバンガロー建設には、Faulknerがしばしば滞在した大都会ロサンゼルスと故郷オクスフォードにおけるバンガロー

の普及を目の当たりにしたことが影響している。[15)]

その一方、Ikeのバンガローが “cheap” で “jerrybuilt” なのは、贈り主であるIkeの妻の父親がそれを一時的な住まいに過ぎないと考えていたからかもしれない。単純な構造と装飾が特徴のコンパクトなバンガローは、新婚夫婦にとって最適な住居形態であった。バンガロー以前に登場した住宅が定住目的で建てられたのに対して、バンガローは社会的・経済的に上昇するにあたっての最初のステップとして見なされていたという。たとえば前述した通信販売大手Sears Roebuckのバンガローは475ドルから1,500ドルまでの比較的買いやすい価格帯で販売されており、新婚夫婦はしばらくした後にバンガローからより立派な住居に移るものと考えられていた（Lancaster 182; Schlereth 94）。Ikeの妻が “Papa told me about you. That farm is really yours, isn’t it?”（297）とIkeに聞く場面は、たとえしばらくの間はバンガローに住んだとしても、若夫婦はいずれMcCaslin農園に移動するはずだと彼女の父親が考えていたことを示している。その後 “When are we going to move?” や “The farm. Our farm. Your farm”（298）と執拗にIkeに迫る彼の妻の発言には、Ikeの農園相続を念頭に置いていた彼女の父親の影響が見られる。Ikeの妻が建設中のバンガローの存在を知っていたのかはテクストでは定かでないが、バンガローの贈与には、娘の玉の輿を狙う父親の期待が込められているのだ。このように考えると、後年のFaulknerに “ethically a prostitute”（*FU* 275）と言われたIkeの妻よりも、彼女の父親の方が冷淡で計算高く見えてくる。

バンガローが新婚夫婦の当面の住まいとして用いられたことに鑑みると、Ikeが結婚後に建てたバンガローも大量生産されたキット住宅である可能性が高い。“Was” と “The Bear” の第4セクションにおいて、Ikeのバンガローが彼の妻の父親からの結婚祝であることが強調して語られているとおり、Ikeは自ら率先してバンガローを建てたわけではない。彼がバンガローに住み続けるのも “for his wife’s sister and her children who had lived in it with him since his wife’s death”（4）であり、自らの意志でMcCaslin農園の相続を放棄したIkeにしてはきわめて受身的な態度に終始している。“The Bear” の第4セクションの終盤には、Ikeのバンガローに関するさらなる言及がある。

> . . . her father already owned the lot in town and furnished the material and he and his partner would build it, her dowry from one: her wedding-present from three, she not to know it until the bungalow was finished and ready to be moved into. . . .（297-98）

この引用から、Ikeの妻の父親がバンガローだけでなく町中の土地も “her dowry” として若夫婦に与えていたことがわかるが、その他に “furnished the material” という描写がある

---

15) 国家レベルの変動や近代化の影響をふまえたより大きな枠組みで “Modernist localism” を考察しているMiles Orvellは、“[t]he Faulknerian small town is not simply a site of nostalgia（though there are certainly elements of the remembered past）but rather of modernity’s ambiguities” と論じている（109）。Faulknerが自身の故郷オクスフォードだけでなく滞在した様々な場所を題材にヨクナパトーファのスモールタウンを形成していることは確かであろう。

のは興味深い。つまり、Ikeの妻の父親はバンガローを建てるうえで必要な建築材料も手配してくれていたのであり、Ikeと彼の仕事のパートナーである “a blasphemous profane clever old dipsomanic”（296）はバンガローを「建てた」というよりは「組み立てた」にすぎないのだ。つまり、“cheap” や “jerrybuilt” といったネガティブな表現や “furnished the material” の記述は、Ikeのバンガローが組立式のキット住宅であったことを物語っている。

21歳で農園の相続を放棄するまではフロンティア精神と自然への畏怖心を持ち合わせていたはずのIkeが、大工になったにもかかわらず、28歳の頃には誰でも簡単に扱えるキット住宅型のバンガローを不徳なパートナーとともに町中に「建てた」のは、きわめて皮肉な結末であると言えるだろう。“I cant repudiate it. It was never mine to repudiate”（245）や “Dispossessed of Eden. Dispossessed of Canaan”（247）と理想論を語って自らの意志で農園を去ったIkeが、最終的に結婚して時代の趨勢に迎合したかのような後半生を送ることになるのは、アーツ・アンド・クラフツ運動の崇高な理念に呼応したバンガローが結果的に規格化・工業化された大量生産型の住宅として全米に普及したことに呼応しているようにも見える。Ikeのバンガローは新たな時代の「アメリカンドリーム住宅」ではなく、それを批判した住宅として描かれているのだ。本作品の中心人物であり、農園放棄という一見勇気の要る行動に出たIkeに対するFaulknerの冷ややかな評価はFaulknerの1958年の発言にもあらわれている。“[Ike] says, This is bad, and I will withdraw from it. What we need are people who will say, This is bad and I’m going to do something about it, I’m going to change it.”（*FU* 246）Rowan Oakや消えゆく他の伝統的建造物を大切にしたFaulknerの目には、農園を放棄したIkeが孤高なヒーローではなくきわめて無責任な人物に映ったのだろう。Ikeのバンガローは彼の不毛な結婚生活を体現するだけでなく、彼の掲げた土地所有に関する理想が表面的で短絡的なことを明らかにするのである。

Works Cited

Aiken, Charles S. “Faulkner and the Passing of the Old Agrarian Culture.” *Faulkner and Material Culture: Faulkner and Yoknapatawpha Conference*. Ed. Joseph R. Urgo and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2007. 3-19. Print.

———. *William Faulkner and the Southern Landscape*. Athens: U of Georgia P, 2009. Print.

“Architectural Style Guide.” *Mississippi Heritage Trust*, 2008. Web. 9 Dec. 2015.

Barker, Stephen. “From Old Gold to I.O.U.’s: Ike McCaslin’s Debased Genealogical Coin.” *Faulkner Journal* 3.1 (1987): 2-25. Print.

Bernert, Annette. “The Four Fathers of Issac McCaslin.” *Critical Essays on William Faulkner: The McCaslin Family*. Ed. Arthur F. Kinney. Boston: G. K. Hall, 1990. 181-89. Print.

Carpenter, Brian. “The Freestanding Poetry of Yoknapatawpha.” *Southern Review* 39.3 (2003): 617-24. Print.

Creighton, Joanne V. *William Faulkner’s Craft of Revision: The Snopes Trilogy*, The Unvanquished *and* Go Down, Moses. Detroit: Wayne State UP, 1977. Print.

Davis, Thadious M. *Games of Property: Law, Race, Gender, and Faulkner’s* Go Down, Moses. Durham, NC: Duke UP, 2003. Print.

Dawson, William P. “Fate and Freedom: The Classical Background of *Go Down, Moses*.”

Mississippi Quarterly 43.3 (1990): 387-412. Print.

Doyle, Don H. *Faulkner's County: The Historical Book of Yoknapatawpha*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001. Print.

Dunn, Margaret M. "The Illusion of Freedom in *The Hamlet* and *Go Down, Moses*." *American Literature* 57.3 (1985): 407-23. Print.

Early, James. *The Making of* Go Down, Moses. Dallas: Southern Methodist UP, 1972. Print.

Faulkner, William. "Appendix: Compsons: 1699-1945." 1946. *The Sound and the Fury: The Corrected Text with Faulkner's Appendix*. New York: Modern Library, 1992. 329-48. Print.

———. *Faulkner in the University*. (*FU*) Ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. 1959. Charlottesville: UP of Virginia, 1995. Print.

———. *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage, 1990. Print.

Gleeson-White, Sarah. "William Faulkner's *Go Down, Moses*: An American Frontier Narrative." *Journal of American Studies* 43.3 (2009): 389-405. Print.

Hines, Thomas S. *William Faulkner and the Tangible Past: The Architecture of Yoknapatawpha*. U of California P, 1996. Print.

Kinney, Arthur F. Go Down, Moses*: The Miscegenation of Time*. New York: Twayne, 1996. Print.

———. "Greenfield Farm." *A William Faulkner Encyclopedia*. Ed. Robert W. Hamblin and Charles A. Peek. Westport, CT: Greenwood Press, 1999. 162-63. Print.

Kuyk, Dirk, Jr. *Threads Cable-strong: William Faulkner's* Go Down, Moses. East Brunswick, NJ: Associated UP, 1983. Print.

Lancaster, Clay. *The American Bungalow, 1880-1930 with Illustrations*. New York: Dover, 1985. Print.

Lawrence, John and Dan Hise. *Faulkner's Rowan Oak*. Jackson: UP of Mississippi, 1993. Print.

Matrana, Marc R. *Lost Plantations of the South*. Jackson: UP of Mississippi, 2009. Print.

Miller, Mary Carol. *Lost Mansions of Mississippi*. Jackson: UP of Mississippi, 1996. Print.

Orvell, Miles. "Order and Rebellion: Faulkner's Small Town and the Place of Memory." *Faulkner and Material Culture: Faulkner and Yoknapatawpha Conference*. Ed. Joseph R. Urgo and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2007. 104-20. Print.

Peters, John G. "Repudiation, Wilderness, Birthright: Reconciling Conflicting Views of Faulkner's Ike McCaslin." *English Language Notes* 33.3 (1996): 39-46. Print.

Rueckert, William H. *Faulkner from Within: Destructive and Generative Being in the Novels of William Faulkner*. West Lafayette, IN: Parlor Press, 2004. Print.

Sanders, Todd. "Architecture in Mississippi During the 20th Century." *Mississippi History Now*. Mississippi Historical Society, Jan. 2010. Web. 9 Dec. 2015.

Schlereth, Thomas J. *Victorian America: Transformations in Everyday Life, 1876-1915*. New York: HarperCollins, 1991. Print.

Schreiber, Evelyn Jaffe. "Imagined Edens and Lacan's Lost Object: The Wilderness and

Subjectivity in Faulkner's *Go Down, Moses*." *Mississippi Quarterly* 50.3 (1997): 477-92. Print.

Sobotka, C. John, Jr. *A History of Lafayette County, Mississippi*. Oxford, MS: Rebel Press, n. d. Print.

Stein, Paul S. "Ike McCaslin: Traumatized in a Hawthornian Wilderness." *Southern Literary Journal* 12.2 (1980): 65-82. Print.

Thomas, Harry. "Hunting Stories & Stories Told about Hunting: What Isaac McCaslin Thinks He Learns in The Big Woods." *Mississippi Quarterly* 60.3 (2007): 561-78. Print.

Walker, David. "Out of the Old Time: 'Was' and *Go Down, Moses*." *Journal of Narrative Technique* 9.1 (1979): 1-11. Print.

Winter, Robert. *American Bungalow Style*. New York: Simon & Schuster, 1996. Print.

Wittenberg, Judith Bryant. "*Go Down, Moses* and the Discourse of Environmentalism." *New Essays on* Go Down, Moses. Ed. Linda Wagner-Martin. New York: Cambridge UP, 1996. Print.

Wolff, Sally. *Ledgers of History: William Faulkner: An Almost Forgotten Friendship, and an Antebellum Plantation Diary*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2010. Print.

ウォーカー、レスター『図説アメリカの住宅――丸太小屋からポストモダンへ』三省堂、1988年。

奥出直人『住まい学体系　アメリカンホームの文化史』住まいの図書館出版局、1988年。

フォーレイ、マリー・ミックス『絵で見る住宅様式史』鹿島出版会、1981年。

八木幸二『アメリカの住宅建築Ⅲ――多様化の時代』講談社、1994年。